開会のあいさつ

福井県立大学　学長
下谷政弘

本日は「九頭竜川プロジェクト」にご来場いただき、ありがとうございました。お礼申し上げます。私どもは、今日せっかくお集まりの皆さま方のご期待に添える講演会となるよう、時間をかけて準備をしてまいりました。私どもは自信をもって今日は皆様にプレゼントできるものと思っています。

今日は学生たち恒例の大学祭「白樫祭」というのをやっております。学内では、にぎやかに音楽も聞こえています。また、今日は卒業生諸君に久しぶりにキャンパスへ来てもらうという「Home Coming Day」にも重なっております。いつもは非常に寂しい静かなキャンパスですが、今日は人口密度が高くなりまして、たいへんうれしく思っております。

本学ができましたのは、1992年、今年、おかげさまで20周年を迎えることができました。その20周年を機会に、来し方を考え、これからの本学の行く末をいろいろ考えよう。通年で、福井県立大学はどうあるべきかということを、皆さんとともに議論する1年間にしよう。そのためにいろいろな催しや企画をやっておりますが、本日の「九頭竜川探究の旅」というタイトルの講演会も、そのうちの重要な一環と位置付けております。

私どもは「九頭竜川プロジェクト」と呼んでいますが、これをあえて企画した趣旨が二つございます。少しだけご説明させていただきます。

一つは、今日大学に入られて正門に横断幕がありました。そこには、私ども福井県立大学はこれからどうしたいのか、ということを書きました。つまり、「地域と世界に開かれた知の拠点を目指す」、そういう大学になりたい、ということなのです。

皆さんご承知のように、最近のグローバル化であるとか、国際化。これは大学のみならず、社会全般に急速に押し寄せております。大学でも、来るべき新しい時代に即応できるようなグローバル人材、特に英語力などを備えた学生を社会へ送り出したい。あるいは、学生たちの尻をたたいて、どんどん留学に行きなさいと言っている。あるいは、海外の大学との学術交流協定を結ぶなど、いろんな企画を行ってきました。

しかし、グローバル化、国際化は、英語が堪能になるだけではもちろん駄目です。車の両輪、もう一つの心構えとして、自分の立っている場所はどこであるか。地元、地域、生まれたふるさとを再認識し、勉強し、そこに愛着を持つようなことも必要であろう。この九頭竜川をめぐる企画とは、そういう新しい時代に、ふるさとのことをもう一度勉強しようという機会を、県立大学として積極的につくり上げていこう。そういう趣旨が一つでございます。

もう一つ、私は生まれ育ちは福井県ではないのですが、ただ福井県に来ましてつねづね思っていることがあります。皆さんのなかにも、同じお考えの方もおられるかもしれませんが、福井県には法学部とか文学部とか、いわゆる人文科学系の学問分野を体系的に教育、研究する学部というものが、他の府県に比べれば少ない、あるいはないと言ってもいいかもしれない。

しかし、福井県というのは、皆さまが自慢するように、見るべき歴史的なスポット、観光の対象物、そこを探っていけば非常に興味深いものが出てくるような宝物をいっぱいもっている。それなのに、私は、なかなかそういう企画や人々の結集が、いままではあまりうまくいっていなかったんじゃないかと感じるのです。ふるさとの歴史、ふるさとをめぐる文学、民俗、人々の営み。広く言って文化かもしれない、人文学のことかもしれない。それらをもっとさかんにしたい。そう思うのです。

私は、福井の人はずいぶんせっかちだなといつも思うのです。何かやろうとすると場合、すぐに役に立つこと、結果が出ることには一生懸命だけど。でも、「すぐに役に立たない」と言えば何か人文学を悪く言っているかもしれないけど、あまり力を入れようとはしない。

しかし、私は 10 年先、50 年先の福井のためには、そういう人文系の分野が、もっともっと盛んにならないといけないと思うのです。自分の県の歴史や文化や、そういうものを、よその県の人に語ってもらいたくない。自分のふるさとのことは自分の言葉で語ろうと。

もちろん、福井県内にある大学や教育機関には、そういう分野の文学、歴史、哲学、民俗、宗教を研究されている方はもちろんたくさんおられる。私は、それらの分野を体系的に研究、教育する場所がない、ということを言っているのです。

しかし、いまからそういうものを福井県のなかに本格的につくるということも、また並大抵なことではない。私は、これまでばらばらにやっておられる方、あるいは、在野で小さな研究会や勉強会や、サークルをつくって活動されている方々が一つにつながっていくことを考えているのです。

九頭竜川が、たくさんの支流からできているみたいに、それらの人々の活動を何とか一つにつなぎ合わせるような場所を、これから少しずつでもつくっていけないかなと。そういう趣旨で、私はこの「九頭竜川プロジェクト」というものを考えたいなと思ってやってきたわけであります。

もちろん九頭竜川は川です。私は、このタイトルで川のことだけやろうとしていません。川も、もちろんやります。ですから、川をめぐる環境であるとか、景観の問題であるとか。これも非常に重要なテーマです。今日はサクラマスの話がありますが、同時にまた、川をめぐる人々の営みということもやってまいりたい。今日はその１回目です。これから２回目、３回目というものがもしできるのならば、私は大変うれしく思っております。

今日のプロジェクトに対しましては、各市、町から多大なご後援をいただきました。大変ありがたく、あらためてお礼申し上げます。今日は、大本山永平寺の大田大穣監院さまにもご臨席いただきました。また、何よりも、お忙しいなかを今日は３名の講師の先生方が、いままで蓄積されたことで十分なのですが、さらにそれに加えて、私がはた目で見ている限りでも、ずいぶんと資料を集め直されたり整理をされたり、多大なご準備をしていただきました。厚く御礼申し上げます。

また、こういう企画スタートさせるということは大変難しいものです。いろいろご準備いただいた皆様にもあらためてお礼を申し上げます。そして、今日ご来場いただきました皆さま方にもう一度お礼を申し上げて、私からのごあいさつとさせていただきます。今日は、本当にありがとうございました。

○司会

簡単に本日の特別講演会の趣旨説明をさせていただきます。

先ほど学長からお話がありましたとおり、今回の「九頭竜川 探求の旅」は九頭竜川プロジェクトの第１回目のイベントとして企画したものです。環境、歴史、民俗文化の三つのテーマを取り上げて講演会を行います。

まず簡単に講師の先生方を紹介いたします。最初の講演を担当されます、サクラマス・レストレーション代表の安田龍司さん。二番目の講演を担当されます、福井大学名誉教授の松浦義則さん。三番目の講演を担当されます、元福井県立博物館副館長、坂本育男さんです。

三つの講演は、それぞれ異なった切り口から九頭竜川を論じるものです。ですが、完全にばらばらではなくて、いずれも「つなぐ」、あるいは「つながる」をキーワードとして共有しています。

もともと川というものは、あるものと別のものを隔てるものですが、同時に隔てながらも二つのものを「つなぐ」ものでもあります。川という隔たりが、いかにして「つながり」を生み出すのか、あるいは、「つながり」と関わり得るのかということに注目しながら各

講演に耳を傾けていただければ、それぞれの講演の「つながり」が明らかになるでしょう。

講演は、それぞれ 30 分です。三つの講演のあとで、質疑応答の時間をもつ予定です。活発な議論ができることを期待しております。

では早速、講演を開始いたします。最初の講演は安田龍司さん、「サクラマスが教えてくれたこと」です。環境をキーワードに九頭竜川を眺めてみたいと思います。

サクラマス・レストレーション代表の安田龍司さんは日本を代表するフライフィッシャーです。1980 年代から九頭竜川をホームリバーとして活動され、九頭竜川のサクラマスと出会ってからは、サクラマスの再生産可能な自然環境を育てるために、九頭竜川流域を中心にさまざまな活動を行っておられます。